

# 古代ローマにおけるインターセックス観の変容

田村 慎雄・矢内 光一

## On the Transformation of the View of Intersexes in Ancient Rome

Mitsuo TAMURA , Koichi YANAI

### 序論

われわれの知るところでは、紀元前3世紀末以降、ローマの元老院はインターセックス<sup>(1)</sup>を神の怒りを伝える怪異(特異・怪しげな事象・事物)、すなわち、「異象prodigium」の一種と認定してインターセックスに宗教的な意味を認め、神々との平和・協調(pax deorum)を更新するために、その殺害を含む宗教儀礼を執行させた。しかし、前1世紀初頭を境にしてインターセックスは異象と認定されなくなり、後1世紀の大プリニウスによると、インターセックスは「かつてはアンドロギュヌスと呼ばれ異象と見なされたが、しかし、今ではお慰み(deliciae)と見なされている」<sup>(2)</sup>。ローマのインターセックス観は変容したのである。なぜであろうか。

この問題について、リュック・ブリソンは『性的アンビヴァレンス』の「第1章 怪物たち(Monsters)」のなかで、シケリアのディオドロスの『歴史叢書(世界史)』の一節を論拠として次のような見解を示している。すなわち、ディオドロスは「[アンドロギュヌスの]現象」を「稀にしか生じないが完全に説明できる解剖学上の出来損ない」と解し<sup>(3)</sup>、「アンドロギュヌスの現象が外科手術によって解決される自然現象であることを示し」て迷信に立ち向かい<sup>(4)</sup>、元首政期には『ヘルマフロディートゥス』は、もはや恐るべき異象とは考えられなかったように思われる。明らかにそれは、ディオドロスによって明示されたような、迷信に対する合理的な反応のおかげである。今や両性をもつ生き物たちは、例えば侏儒たちと同じように、自然の戯れ(freaks of nature)と見なされた<sup>(5)</sup>、と。

しかし、ブリソンのこの見解は一面的であると言わざるをえないであろう。なぜなら、外科手術の効力に訴えるというディオドロスに見られる類いの「合理的な反応」がインターセックス観の変容の1つの要因であったことは認められるとしても、そうした「反応」が影響を及ぼしうるには、他方で、それが影響を及ぼしうる程度にまで、インターセックスを異象と見なす迷信の拘束力そのものが弱まっていたのでなければならぬと考えられるからである。

本稿で企図するのは、ディオドロスに見られる類いの「合理的な反応のおかげで」ローマのインターセックス観が変容したというブリソンの見解に対して、インターセックスを異象と認定することを通じてインターセックスの異象とその宗教儀礼が担っていた政治的な意義が失効したことに由来する、迷信の拘束力の弱化という要因を突き合わせ、そのことによって、外科手術の効力に訴えるという「合理的な反応」がインターセックス観の変容に果たした役割を相対化することである。このようにブリソンの見解に異議を申し立てることは、インターセックスに対する外科手術が議論的になってきた近年の状況のなかで、ブリソンが「2重のセクシュアリティ(dual sexuality)の問題に関心をもつすべての人々のための作業の手助け」を提供するという意図をもって『性的アンビヴァレンス』を公刊している<sup>(6)</sup>ことを考えれば、是非とも必要なことであると考えられるのである。

## I

前3世紀末以降、インターセックスは、他の特異な事象・事物と同様に、元老院によって異象と認定された。そして、インターセックスの異象は、他の異象とともに、大神祇官長 (pontifex maximus) の館の外に1年ごとに掲げられた白板 (tabula dealbata) に記録された<sup>(7)</sup>。白板は散逸し、その集成である『大神祇官長年代記』 (annales maximi) も同様であるが、ティトゥス・リウィウスの『ローマ建国史』に異象の記録が引かれている<sup>(8)</sup>。今そのなかからインターセックスの異象を含む箇所を2つ引用する。

前209年。『ローマ建国史』に初めてインターセックスの異象が記されたのはこの年である<sup>(9)</sup>。

「都市ローマから両執政官が出立する以前に、諸々の異象が贖われる (prodigia procurari) ことが決定された。アルパ山でユピテルの像と神殿近くの樹木が雷に打たれ、オステティアではある水場が、カプアでは市壁とフォルトゥナの神殿が、シヌエッサでは市壁と市門が、そうであった。これらは雷に打たれた。さらに、アルパ湖の水が血の色をして流れ、ローマではフォルス・フォルトゥナ神殿の神像安置部屋の内部で、[神像が戴く] 冠にあった小像が頭部から手のなかに自ら滑り落ちたと証言する者たちがいた。そして、プリウエルヌムで1頭の雄牛が喋り、混雑した広場で1羽の禿鷲が店に舞い下り、さらに、シヌエッサで性が男性と女性の間でどちらとも定まらない赤子が生まれ——大抵の場合そうであるが、言葉を合成するにはギリシア語の方が容易であるので、民衆はそうした者を [ギリシア語の合成語を用いて] 『アンドロギュヌス』と呼んでいる——、乳の雨が降り、象の頭をもつ男子が生まれたことは十分に確かなことであった。以上の異象は成熟した生贄 (hostiae maiores) で贖われ、すべての神座の周囲で1日の間、公禱 (supplicatio)、すなわち、懇願の祈禱 (obsecratio) を行うことが命じられた。そして、その当時アポロ競技祭 (ludi Apollini) の奉納が誓約され舉行されていたが、そのように、法務官ガイウス・ホスティリウス [・トゥブルス] が同競技祭の奉納を誓約し舉行することが決定された」<sup>(10)</sup>。

前207年。前209年に続いてインターセックスの異象が記されている。

「両執政官が出立する前に、9日間の祭礼 (novendiale sacrum) があった。というのも、ウェイで天から石がその前に降っていたからである。1つの異象が言及されると、普通そうであるように、続いて他の異象も伝えられた。ミントウルナエでユピテルの神殿とマリカの聖森が雷に打たれ、またアテッラでも市壁と市門が雷に打たれた。ミントウルナエの人々は、いっそう恐ろしいことだとして、市門で血の川が流れたことをつけ加えた。また、カプアで夜に1匹の狼が市門に入り、夜警を引き裂いていた。これらの異象は成熟した生贄で贖われ、大神祇官たち (pontifices) の決定によって公禱が1日の間とり行われた。その後、アルミルストルムで石の雨が降るのが見られたため、再び9日間 [の祭礼] がとり行われた。[こうして] 人々の心は宗教的不安から解放されたのであったが、それをフルシノで4歳児に等しい [大きさの] 赤子が生まれたと伝えられたことがまたもやかき乱した。その大きさのゆえにというよりも、むしろ、2年前にシヌエッサでそうであったように、その子も、男性であるか女性であるかがはっきりしない状態で生まれたがゆえに、驚くべきものであった」<sup>(11)</sup>。

リウィウスは、このようにインターセックスの異象を記したのである。

直ちに了解されるように、前209年のインターセックスの異象は、他の異象とともに「成熟した生贄」の供犠や、「懇願の祈禱」を行う「公禱」<sup>(12)</sup>、「アポロ競技祭」といった既定の宗教儀礼を執行せしめた。それに対し、その2年後の前207年のインターセックスの異象は新たな宗教儀礼を生ぜしめ、これ以降、前1世紀初頭に至るまで、インターセックスの異象に伴ってその宗教儀礼が執行されるようになる。しかし、この点に言及する前に、異象の認定とその宗教儀礼の執行に関わる一連の手続きについて一言しておく。

都市ローマや、イタリアの同盟市や植民市、さらにイタリア外の地域で見慣れない事象・事物が生じると、それが執政官に伝えられ (nuntiatio)、新執政官が職務に就く年初に元老院に報告された (relatio)。元老院は、その報告が信用できるか否か、そして、伝えられた事象・事物がローマに関係するものであるか否かを審議した。それらがいずれも肯定・是認されると、それは異象と認定された (susceptio)。こうして

異象が認定されると、次にどのような宗教儀礼が執行されるべきかが審議され、その際、専門家の意見が求められることもあった。ローマの宗教を監督した大神祇官や、『シビュラの書』(libri Sibyllini)を管理・解釈する十人神官団(decemviri sacris faciundis)、さらにエトルリアの卜師(haruspex)が、そうした専門家に当たる。彼らに意見が求められた場合、その意見が検討され承認された後、異象を贖い、神々との平和・協調を更新するために、宗教儀礼が執行されたのである(procuratio)。

しかし、前207年の事態は特異であった。時にローマは第2次ポエニ戦争最大の危機を迎えつつあり、イタリア南部に駐留する兄ハンニバルに合流すべく、ヒスパニアを立ったハスドルバルが、大軍を率いてアルプス山脈まで押し寄せ、雪解けを待ちながらアルプス越えの機を窺っていた。すでに前年末にその報告を受けていた<sup>(13)</sup>ローマの不安が高まるなか、「9日間の祭礼」が終わって両執政官が出立する直前に、改めて多数の異象が認定され、既定の宗教儀礼がさらに2度執行されたが、それをもってしても異象は止まなかった。フルシノで「4歳児に等しい[大きさ]のインターセックスが生まれたという知らせがあり、重ねてそれが異象と認定されたのである。

ローマ宗教の効力が問われるこの緊急事態にあつて、卜師が召喚されることになった。「エトルリアから召喚された卜師たちは、それは恐ろしく嫌悪すべき(foedus ac turpis)異象であり、ローマの地から追放され、大地との接触から離され、海中深く沈められるべきであると述べた。彼らはその子を生きのまま櫃に押し込め、海に運んで投げ棄てた」<sup>(14)</sup>。

こうして異象と認定されたインターセックスは卜師たちによって除去されたのであるが、それに続いて「大神祇官たちも、27人の処女が都市ローマを進みながら賛歌を歌うよう決定した」<sup>(15)</sup>。その決定は次のように実行された。

「2頭の白い牝牛がアポッロの神殿からカルメンティスの市門(Porta Carmentalis)を通って都市ローマへ導かれた。それらの後に、ユノ・レギナ(Iuno Regina)の2体の糸杉の神像が運ばれていった。続いて、長い服をまとった27人の処女がユノ・レギナへの賛歌を歌いながら進んだ——その歌は、当時の粗野な気性からすれば称賛に値したかもしれないが、もし再現されるなら、今では受け入れられない無骨なものであるであろう——。処女たちの列に、月桂冠をかぶり、紫紅縞の服をまとった十人神官団が続いていた。彼らは市門からウィクス・ユガリウス(Vicus Iugarius)を通ってフォルム(Forum)に至った。フォルムで行列は止まった。そして、処女たちは1本の綱を手から手へと渡して[皆が繋がり]、踏む足に声の響きを合わせながら行進した。それから、ウィクス・トゥスクス(Vicus Tuscus)とウェラブルム(Velabrum)を通り、フォルム・ボヴァリウム(Forum Bovarium)を経て、クリウス・プブリキウス(Clivus Publicius)、さらにユノ・レギナの神殿に進んだ。2頭[の白い牝牛]は十人神官団によってそこで生贄として捧げられ、糸杉の像は神殿のなかに運び込まれた」<sup>(16)</sup>。

このようにしてインターセックスの異象の宗教儀礼は終了し、両執政官が都市ローマから出立した。彼らはメタウルス川の畔の戦いでハスドルバルを破り、ローマは第2次ポエニ戦争最大の危機を乗り越えたのである。そして、まさにこの事件により、ローマと神々との平和・協調がこの宗教儀礼でもって更新された<sup>(17)</sup>ことが示されたのであった。

ところで、前207年に続いて前200年にもインターセックスが異象と認定された。

「ルカニアの人々のところで天が燃えたこと、プリウエルヌムで晴天の空で太陽が1日中赤かったこと、ラヌウィウムではユノ・ソスピタの神殿で夜に途方もなく大きな物音が起こったことが知らされていた。さらに、動物たちの不吉な子孫がより多くの場所で報告されていた。サビニ人のところで、男性であるか女性であるかがはっきりしない赤子が生まれ、他にもすでに16歳でやはり性の定まらない者が発見された。フルシノで豚の頭をもつ子羊が、シヌエッサで人間の頭をもつ豚が、ルカニアの人々のところでは国有地で5本の脚をもつ子馬が生まれた。それらすべてが恐ろしく醜いものであり、誤って本来そうでない子孫たちをもたらした自然のなせる業と見られた。とりわけ、セーミマースたちが嫌悪され、最近ガイウス・クラウディウス[・ネロ]とマルクス・リウィウス[・サリナトル]が執政官であった時に同じような異象

の子が運び去られたように、彼らは直ちに海に運び去られるよう命じられた。それにもかかわらず、〔元老院は〕十人神官団にその怪異（portentum）について〔シビュラの〕書を調べるよう命じた。十人神官団は書物に基づき、最近その異象の直後に挙行されたのと同じ儀式を指示した。加えて、彼らは、27人の処女によって都市ローマをぬって賛歌が歌われ、ユノ・レギナに供物が献上されるよう命じた。十人神官団の回答に基づいてこれらのことが行われるように執政官ガイウス・アウレリウス〔・コッタ〕が指揮した。賛歌は、父たちの時代〔前207年〕には〔ルキウス・〕リウィウス〔・アンドロニクス〕が作ったが、この時はプブリウス・リキニウス・テグラが作った<sup>(18)</sup>。

こうして、前207年に初めて執行された宗教儀礼は、インターセックスの溺殺という印象的な要素を保ちながらインターセックスの異象に伴って繰り返されることになった。その後、1世紀以上に渡ってである。すなわち、前207年から前133年までの75年間に、この宗教儀礼によって6人のインターセックスが殺害された。その後、前125年から前92年までの34年間に、おそらく11人、とりわけそのうちの6人は前90年代に殺害されたが、前92年の事例を最後にインターセックスの異象とその宗教儀礼は姿を消した（本稿末の表を参照）。直ちに了解されるように、インターセックスの異象の認定頻度は、前125年以降上昇し、前1世紀初頭に頂点に達した。そして、その後すぐにインターセックスは異象と認定されなくなり、後1世紀には「お慰み」と考えられるようになったのである。なぜであろうか。

この問題についてブリソンが示した見解を序論で取り上げたが、ここで『性的アンビヴァレンス』が公開される以前の他の見解を参照しながら、以下でこの問題を考察するための枠組みを提示したい。

ロバート・ドルーズは次の2点を主張した。すなわち、「性的に曖昧な諸個人に関わるローマ人の迷信は、エトルリア人の教えによってかき立てられたが、ギリシアの合理主義から批判されるようになり<sup>(19)</sup>、また、「前90年代にアンドロギュヌスの贖いが急増した後」、元老院は「贖いの儀礼に対する公衆の熱狂を鈍らせる」よう試みた<sup>(20)</sup>、と。

ロバート・ガーランドは『見つめる者の目』のなかで、次のように主張している。すなわち、共和政後期から元首政初期にかけて異象は衰退したが、「容認しうる程度に異常であるものという広い範疇のなかにインターセクシュアルたち（intersexuals）が吸収されたことは、差し迫った危機に直面して無力感を、完全に除去するのではないにしても、減じるよう目論まれた、宗教的な態度における包括的な変化の一部であったであろう<sup>(21)</sup>、と。

ファイト・ローゼンベルガーは『飼い馴らされた神々』のなかで、ドルーズとガーランドに批判の矛先を向けた。そもそも異象を認定したのは元老院であり、その宗教儀礼の執行を決定する際に公衆は「決定的な役割を全くもたなかった<sup>(22)</sup>（ドルーズ批判）。また、異象は「深い抑鬱へのきっかけ」であったのではなく、その宗教儀礼とともに「宗教上の1年の通常の構成要素」であった<sup>(23)</sup>（ガーランド批判）。そして、ローゼンベルガー自身は、ドルーズが指摘した「ギリシアの合理主義」の影響を考慮に入れて、次のような見解を示している。

「異象の制度が効力を有していた間、ヘルマフロディートゥスたちは異象と見なされ、除去され、贖われた。同時に、遅くとも前1世紀以降、ギリシア哲学の影響に由来する合理主義的な思潮が看取されうる。共和政として編成された国家の漸次的な崩壊はオクタウィアヌス／アウグストゥスが単独の支配者として立てられることで最終的に終わったが、この崩壊は受け継がれてきた異象の解釈図式を重要でないものと思わしめた。この真空状態に、ヘルマフロディートゥスたちの扱いに関してギリシア人によって示された可能性が入り込んで住み着いた。アンドロギュヌスたちは、性的欲望や学問の好奇心、あるいはたんに、物好きや嘲笑の対象になったのである<sup>(24)</sup>。

換言すると、政治的な面において（politisch）、「異象の制度」を育んできた「共和政として編成された国家の漸次的な崩壊」によって「受け継がれてきた異象の解釈図式」が失効したため、ローマのインターセックス観に「真空状態」が生じた。他方、知的な面において（intellektuell）、「前1世紀以降」、ギリシア流の「合理主義的な思潮」が広まり、そして、そこで示されたインターセックス観がその「真空状態」に「入

り込んで住み着いた」ため、インターセックスは「性的欲望や学問的好奇心、あるいはたんに、物好きや嘲笑の対象になった」——このようにローゼンベルガーは考えているのである。

本稿は、インターセックス観の変容を政治的な面と知的な面の2面から説明するローゼンベルガーの枠組みに依拠して、まず、その変容の1つの要因として、外科手術の効力に訴えるというディオドロスに見られる類いの「合理的な反応」を確認し、ローマにおけるその影響を推定する。次に、インターセックスが異象と認定されなくなり、そうした「合理的な反応」が実際に影響を及ぼしうる程度にまで、インターセックスを異象と見なす迷信の拘束力が弱まったことをもう1つの要因と見て、インターセックスが異象と認定されなくなった原因を明らかにするために、インターセックスの異象とその宗教儀礼の担った政治的な意義が失効するに至る経緯を推定する。

## II

前1世紀中頃に『歴史叢書』を著したディオドロスが、そのなかで「2つの形をもつ者」(δίμορφος)と思われるような者を話題にしている。以下にその一節を引用するが、それはアレクサンドロス・バラスの最期から始まる。

前150年、アレクサンドロス・バラスは、エジプトの王プトレマイオス・フィロメトルらの支援を得てデメトリオス・ソテルを破り、シリアの王位に就いたが、その後、デメトリオス・ソテルの息子で後のデメトリオス・ニカトルの反攻とプトレマイオス・フィロメトルの裏切りに遭う。そして、前146年、シリアのアンティオケイア近傍を流れるオイノパラス川の畔の戦いで破れ、敗走する<sup>(25)</sup>。

「アレクサンドロスは、戦闘の後、500人を伴ってアラビアのアバイと呼ばれる土地に逃れ、そこの支配者ディオクレスを頼った。幼かった息子のアンティオコスを予めからその人に委ねていたのである。その後、アレクサンドロスと一緒にいたヘリアデスとカシオスを取り巻く指揮官たちが、自分たちの安全を図ろうとして密かに使者を送り、アレクサンドロスを弑するつもりであると告げた。そして、デメトリオスが彼らの考えていたことに同意したため、彼らは王の裏切り者になっただけでなく、殺害者にもなった。このようにして、アレクサンドロスは親しい人々によって殺されたのである。

しかし、アレクサンドロスが死ぬ前に起こった、思いもよらないことであるがゆえにおそらく信じられないであろう特異な事態を無視すべきでないであろう。すなわち、アレクサンドロス王が、その時より少し前、キリキアで——そこにはアポッロ・サルペドンの聖地があると言われていた——神託をうかがっていた際に、神は、2つの形をもつ者をもたらした場所に用心するよう彼に答えたと言われていた。そして、その時は、神託は謎であるように思われたのであったが、しかし、その後、王が死んだ後で、神託の言葉は次のような理由から理解されたと言われていた。

アラビアのアバイと呼ばれるところにディオファントスという名のマケドニア人が住んでいた。この男は、土地のアラビア人女性を娶って自分自身と同名の息子をもうけ、またヘライスという名の娘をもうけた。その後、彼は、息子が盛年に達する前に死んでしまう目にあったが、娘の方は、結婚適齢期に差しかかると嫁資を与えて、サミアデスという名の者と一緒に住ませた。さて、この男は、娶ったその女と1年間一緒に暮らした後、長期に及ぶ旅に出かけた。他方ヘライスは、言われているところでは、異常でまったく信じがたい病気に陥った。すなわち、強度の炎症が彼女の下腹部に生じた。そして、その箇所はさらに大きく腫れ上がり、次いで高熱を伴うようになった。そのため、医師たち(ιατροί)は子宮の頸部に潰瘍が生じたと診断した。そこで、彼らは炎症を抑えるであろうと考えた治療を施していたのであるが、さらに7日目に表面が裂け、ヘライスの女性器から、睾丸までもが飛び出した。ところで、女性器の断裂とその出来事が起こった時、母親と2人の侍女を除いて、医師も他の外部の者たちも居合わせなかった。さて、その時、彼女たちは、その異常さのゆえに開いた口が塞がらなかったが、ヘライスに対して可能であった世話をを行い、その出来事について沈黙した。病気から解放された女は、女性の服を着続け、そしてまた、家に留まる女らしい振る舞いを保ち続けた。しかし、彼女はその特異な事態に関

する知識を共有する者たちによってヘルマフロディートゥスではないかと思われていた。そして、それ以前に営まれた夫との共同生活では、自然に即した性交は理に適わないため、彼女は男の交わり [= 男性同性愛の交わり] によって気に入られていたと思われていた。さて、体のこのあり方が外部の人々には知られていなかった時にサミアデスが戻って来て、当然のことながら、妻を探し始めた。だが、言われているところでは、彼女の方は恥ずかしさのゆえに眼前に現われようとせず、そのため、サミアデスは耐え難くなった。そして、彼はいっそう頻繁に迫るようになって妻を要求したが、父親が同意しようとせず、また、その理由を言うことを恥じていたので、不和は大きなものになった。そのため、彼は自分の妻をめぐるその父親を告訴した。あたかも劇におけるように、偶然が、特異な事態の異常さを告発へと導いていったのである。さて、裁判官たちが席に着いて弁論が交わされた。問題の人物もその裁判に同席していたが、裁判官たちは、夫が妻を支配すべきか、父親が娘を支配すべきかについて、答えを出せずにいた。結局のところ裁判官たちが妻は夫に従うべきであると考えていた時に、彼女は真実をすっかり明らかにし、装っていた服を勇気を奮い起こして脱ぎ、自然の男であるものを皆に示し、男が男と一緒に暮らすことを強要しようとする者がいるのであれば激しく抗議すると声を張り上げた。そして、誰もが仰天し、驚嘆の声をあげてその特異なことを認めたのであるが、言われているところでは、ヘライスは恥が顕わになったので女性の衣装を青年の身づくろいに着替え、他方で医師たちは、顕わになったものが自分たちに示されると、男性器が女性器の卵形の箇所これまで隠されており、通常とは違って皮膚が [男] 性器をすっかり包んでいたために、瘻管が生じて、そこから排泄物 [= 尿] が排出されていたことを知り、そのため、以前に瘻孔ができていた箇所を傷つけて癒痕を形成させなければならなかったし、また、男性器を秩序あるものに整えて可能な治療を施したと思われた。さて、ヘライスは、名前をディオファントスに変え、騎士団に加えられ、そして、[アレクサンドロス] 王とともに戦列につき、アバイと一緒に退却した。そのため、2つの形をもつ者が生まれていた場所であるアバイで王が殺害された時、以前は理解されなかった神話は理解されたのである。サミアデスの方は、言われているところでは、恋情と以前の関係の虜になっており、また、自然に反した結婚を恥じる思いに悩んでもいたため、遺言によってディオファントスを財産の相続人に定め、自分自身を生きることから解き放ってしまい、こうして、女と生まれていた方が男の名声と勇ましさを手に入れたのに対して、その男は女の魂よりも弱い者になった。

この状況と同じような特異な事態が、30年後にエピダウロス人の国で起こった。すなわち、少女であると思われ、両親がおらず、名をカッロという1人のエピダウロス女性がいた。彼女は、自然な状態では女性にもともと与えられている孔を塞がった状態で有していたが、しかし、『櫛』と呼ばれているもの [= 女性の外陰部] の側のある箇所が生まれつき瘻孔になっており、そこから液体の余剰なもの [= 尿] を排出した。彼女は年頃になって、同国人の1人と共に住むようになった。2年の間その男と一緒に暮らしたが、女性の性交を受け入れず、自然に反した交わりを甘受せざるをえなかった。その後、彼女は『櫛』のまわりに炎症が生じ、さらに、激しい痛みが生じたため、多数の医師たちが呼び集められた。他の誰一人として治療することを引き受けようとしなかったが、1人の薬売り (φαρμακοπώλης) が健康にしてみせると申し出て、腫れあがった箇所を切開した。するとそこから、男性器、すなわち、一對の睾丸と口の塞がった『茎』 [= 陰茎] が飛び出たのである。誰もがその特異なことに仰天したが、その薬売りは残りの不具合な部分を救う治療に取りかかった。そこで、彼はまず、男根の先端を切開し、尿道まで通路を作って [切開した箇所と] 繋ぎ、そこに銀製の管を通して液体の余剰なものを排出し、他方で、瘻孔ができていた箇所に傷を作って閉じ合わせた。そして、このようにして治療を終えた彼は、2重の報酬を要求した。すなわち、自分は、病気の女性を引き受け、健康な青年にして返したと主張したのである。カッロは、織機の杼やその他女性が行う羊毛を紡ぐ仕事を打ちやり、代わりに服やその他のあり方を男のものにし、Nの1字を最後に加えて名前をカッロンと変えた。ある人々によって言われているところでは、男性の姿に変わる前、彼女はデメテルの女司祭であり、男たちには見ることをできないことを見たため、不敬の訴訟を起こされたという。

ネアポリスや他のさらに多くの場所でも同様に、そのような特異な事態が起こったことが記録されているが、しかし、男性器と女性器が合わさった2つの形をもつもの（δίμορφος τύπος）が作られたのではなく——なぜならそれは不可能であるから——、むしろ、自然が人間を仰天させ欺くために（εις έκπληξιν καὶ ἀπάτην τῶν ἀνθρώπων）、身体の諸部分によって誤った像を思い描かせる（ψευδογραφέω）のである。それゆえ、われわれもそれらの特異な事態を記録に残しておくべきだと考えたのであるが、それは、読む人々に気晴らしではなく、利益をもたらすためである。というのも、多くの人々がそのようなことは異象であると信じ、[それらに]迷信的な恐れを抱いており（δεισιδαιμονέω）、しかも、個々人だけでなく、民族や国家までもがそのようであるからである。ともかく、同盟市戦争（Μαρσικὸς πόλεμος [91-87B.C.]）が始まった時、ローマの近くに住み、先に述べた者たちと同じようなアンドロギュヌスを娶っていたイタリア人が[そのことを]元老院に申し出ると、元老院は迷信的な恐れを抱き、エトルリアの卜師たちの言を信じて、[そのアンドロギュヌスを]生きたまま焼くよう命じたと言われている。こうして、[先に述べた者たちと]同様の性器を共有していたが、しかし、本当は異象でなかったその者は、それが病気だと知られていなかったために不当に殺されてしまったと言われているのである。その少し後にアテナイ人のところでも同じような者が生まれ、その症状が知られていなかったために生きたまま焼き尽くされたと言われている。実際また、ハイエナと呼ばれる動物は雄であると同時に雌であり、1年おきに交互にのしかかりあうという話をする者たちもいるが、しかし、真実はそうではない。なぜなら、どちらの性も、単純で[2つの性器が]混在していない（ἀπλόος καὶ ἀνεπίμικτος）性器をもっているのであるが、しかし、誤った像を思い描かせ、たまたま目にする者らを欺くものが、余分に付いているからである。すなわち、雌には、性器に雄の性器に似たようなものが付いており、逆に、雄には、雌の性器のように見えるものが付いているのである。同じことは、すべての生き物についても当てはまる。実際に異象はあらゆる種類のものが数多く生まれるが、しかし、それらは育つわけではなく、完全な成長に至ることができないのである。以上のことは、迷信の恐怖を正すために（πρὸς διόρθωσιν δεισιδαιμονίας）述べたとされたい<sup>(26)</sup>。

ディオドロスは、このようにして「2つの形をもつ者」と思われるような者の話を2つ記し、さらに、そのような者の話を記す意図も明らかにしている。

自ら打ち明けたように、ディオドロスの意図は、読者の「気晴らし」、すなわち、読者を「思いもよらないこと」で楽しませることではなかった。「2つの形をもつ者」と思われるような者に「迷信的な恐れを抱いて」いる人々がいるが、その迷信的な恐れゆえに殺害された者たちがいたという事実を踏まえて「迷信の恐怖を正す」ことこそ、ディオドロスの意図であった。従って、ヘライスとカッロの話は「迷信の恐怖を正すために」記されたのであるが、ディオドロスは、彼らの話を手掛かりにし「2つの形をもつ者」と思われるような者について次のような見解を示した。そもそも「どちらの性も、単純で[2つの性器が]混在していない性器をもっている」が、「自然が人間を仰天させ欺くために、身体の諸部分によって誤った像を思い描かせる」ような者がある。すなわち、ディオドロスは、「2つの形をもつ者」と思われるような者を「人間たちを仰天させ欺く」「自然の戯れ」と見なす一方、「どちらの性も、単純で[2つの性器が]混在していない性器をもっている」ので、そのような者は「誤った像を思い描かせる」ものを形作られていたと考えたのである。それゆえ、ディオドロスにとって、本来そうあるべき対応とは、外科手術を行うこと、すなわち、「誤った像を思い描かせる」ものの下に隠された正しい性器を暴き、それを整えることであった。ヘライスの場合には、独りで「男性器が飛び出した」が、その後、「医師たち」は瘻孔を塞ぎ、「男性器を秩序あるものに整え」た。また、カッロの場合、「薬売り」は、「腫れあがった箇所を切開し」て自ら「男性器」を暴いた後、陰茎に尿道を形成し、瘻孔を塞いだのである。そして、ヘライスは「ディオファントス」という男性名に改名し、「騎士団に加えられ」て「男の名声と勇ましさを手に入れ」、また、カッロは「服やその他のあり方を男のものにし」て、「カッロン」という男性名に変えた。すなわち、ディオドロスの見るところでは、外科手術の結果、正しい性器が整えば、その性に相応しい性格を得ることが

でき、社会生活に復帰できるのである。

ディオドロスは、このように、ヘライスとカッロの話を伝えながら、「2つの形をもつ者」と思われるような者は、「人間たちを仰天させ欺く」「自然の戯れ」である一方、「誤った像を思い描かせる」ものを形作られていたが、外科手術の結果、正しい性器が整うのであり、それが整えば、その性に相応しい性格を得て社会生活に復帰できるということを示し、「2つの形をもつ者」と思われるような者に対する「迷信の恐怖を正す」ことを企図したのである<sup>(27)</sup>。

ところで、われわれの知る限りでは、ディオドロスに続いて「2つの形をもつ者」と思われるような者に対する外科手術に言及したのは、後1世紀末頃の高名な医師レオニダスであった<sup>(28)</sup>。7世紀の医師アイギナのパウロスが次のように記している。

「ヘルマフロディートゥスの症状は、『ヘルメース』と『アフロディーテー』を結合することから名づけられたが、どちらの性にもはなはだしい醜さをもたらす。すなわち、レオニダスによると、それには異なる4つの種類があり、そのうち3種は男性に形成され、1種は女性に形成される。男性では、毛を備えた女性器が、時に会陰に、時に陰囊の中央に位置しているのが見られ、さらにこれらに加えて第3の種類があり、その場合、一部の者では、陰囊にある〔女〕性器状のものから尿が排出される。女性では、性器より上の恥骨にしばしば男性器が位置しているのが見出され、突起物が3つあって、そのうち1つは茎状をなし、2つは[一對の]睾丸状をなしている。ところで、男性の第3の種類——ここでは尿が陰囊から排泄される——は加療できないが、残りの3種は、余分な物が除去され、さらに傷が治療されることによって、治療される」<sup>(29)</sup>。

レオニダスはこのように「ヘルマフロディートゥスの症状」を4種類に分類し、「男性の第3の種類」を除く「残りの3種は、余分な物が除去され、さらに傷が治療されることによって、治療される」と見たのである。

さて、このレオニダスの見解を踏まえて、今一度ヘライスとカッロの話を振り返ろう。ヘライスの場合、「医師たち」は瘻孔を塞ぎ、「男性器を秩序あるものに整え」たが、それは独りで「男性器が飛び出した」後のことであった。当初「医師たちは子宮の頸部に潰瘍が生じたと診断し」て治療を誤ったのである。それから30年後のカッロの場合には、そもそも「多数の医師たち」の「誰一人として治療することを引き受けようとしなかったが、1人の薬売りが健康にしてみせると申し出て、腫れあがった箇所を切開し」て、自ら「男性器」を暴いたのであった。「医師たち」ではなく「藪医者として評判の悪かった」胡散臭い「薬売り」<sup>(30)</sup>こそ、病状を正しく判断し、隠されていた正しい性器を暴いて「誤った像を思い描かせる」ものを形作られていた性器を修正し始めた。そして、その後、およそ200年を経て後1世紀末頃になると、「余分な物」を形作られていた性器が、レオニダスのような医師によりその「症状」に従って分類され、修正されたのである。このことから、外科手術の効力に訴えるというディオドロスに見られる類いの「合理的な反応」が影響を及ぼし、「2つの形をもつもの」と思われるような性器を修正することを正当化していったが、他方で、「2つの形をもつ者」と思われるような者は「人間たちを仰天させ欺く」「自然の戯れ」と見なされるようにもなり、インターセックスが「お慰み」になった——このように推定できよう。とは言え、「合理的な反応」が影響を及ぼすためには、そもそも、インターセックスが異象と認定されなくなって、そうした「反応」が実際に影響を及ぼしうる程度にまで、インターセックスを異象と見なす迷信の拘束力が弱まっていなければならないであろう。では、なぜインターセックスは異象と認定されなくなったのであろうか。この問いに答えるために、以下では、まず、前207年のインターセックスの異象とその宗教儀礼を再び取り上げ、ブルース・マクベインの所説に依拠して、それらが元老院とエトルリア貴族の関係において「伝達媒体」としての政治的な意義を担っていたことを確認する。次に、前125年以降の元老院とエトルリア貴族の関係を探り、そうした政治的な意義が失効するに至る経緯を推定する。

## III

第2次ポエニ戦争下の前212年以降、エトルリアにはローマ軍2軍団、およそ1万人の兵士が配置された<sup>(31)</sup>。そして、前209年、そのローマ軍を指揮するガイウス・カルプルニウス・ピソからアッレティウムを中心に離反の恐れありという報告があった。元老院は実状を調査するため直ちにマルクス・クラウディウス・マルケッルスを派遣したが、エトルリアはローマ軍の増派を恐れて平静を保った<sup>(32)</sup>。しかしながら、前208年に、「新たな謀議が何ら生じないように警戒する」という任務を負ってトゥブルスがエトルリアのローマ軍の指揮を継いだ<sup>(33)</sup>。後も、「アッレティウムの人々に関する報告は日ごとに深刻になっていった」。それゆえ、元老院は、トゥブルスにアッレティウムで人質を求めるよう指示し、その人質を都市ローマに護送するためガイウス・テレンティウス・ウァッロを派遣した。それに対してアッレティウムでは指導者7人が逃亡したが、帰還したウァッロからこの報告を受けた元老院は「エトルリアの暴動が切迫しているかのごとくに」考え、ウァッロに援軍を率いて再度アッレティウムに向かうよう指示するとともに、トゥブルスに「職務地域全体を巡回し、反乱を起こすことを熱望している者たちに好機が何ら与えられないよう警戒」させた<sup>(34)</sup>——このように、遅くとも前212年以降、元老院はエトルリアの綱紀を憂慮していたが、前208年の初冬以降、ハスドルバルの接近<sup>(35)</sup>がエトルリアの綱紀を悪化させた。第2次ポエニ戦争の初めから、カルタゴは「ローマによって支配されている諸民族のための自由」をもたらすと喧伝していたが<sup>(36)</sup>、ハスドルバルの接近は、ローマとの不平等な同盟 (*foedera iniqua*) 関係<sup>(37)</sup>を逃れる好機として、エトルリア貴族の離反の動きに拍車をかけたのである<sup>(38)</sup>。

ところで、元老院がエトルリアの綱紀を憂慮していた頃、エトルリア同盟市の異象が初めて認定された<sup>(39)</sup>。前210年、「タルクィニイで人間の顔をもつ豚が生まれた」<sup>(40)</sup>。これに続いて、先述の通り、前209年にインターセックスが異象と認定された後、前208年にもエトルリア同盟市の異象が認定された。「ウォルシニイで湖が血で染まった」<sup>(41)</sup>のである。

そして、前207年——ハスドルバルがアルプス山脈まで押し寄せたという報告を前年末に受け、ローマの不安は高まり、すべての元老院議員たちが「両執政官はできるだけ早急に戦争に赴くべきである」と考えた。というのも、「アルプス山脈の此方側のガッリア人や反乱の希望に鼓舞されたエトルリアを刺激することがないように、ハスドルバルがアルプス山脈から下ってくるのに立ち向かうべき」だからである<sup>(42)</sup>。このように、都市ローマとアルプス山脈の間に位置するエトルリアの綱紀に元老院が憂慮を深めていたまさにこの時、先述の通り、多数の異象が繰り返し認定され、既定の宗教儀礼が3度執行された後に、フルシノのインターセックスが改めて異象と認定され、その宗教儀礼が初めて執行されたのであるが、それらは政治的な意義を担っていた。それは何か。

リウィウスは、この時「男性であるか女性であるかがはっきりしない状態」で「4歳児に等しい[大きさの]赤子が生まれた」という知らせがあったことを伝えているが、これに続く他のインターセックスの異象の事例を見ると、前200年に「他にもすでに16歳でやはり性の定まらない者が発見され」、前186年に「12歳ぐらいのセーミアースが発見された」<sup>(43)</sup>。また、前119年に「8歳のアンドロギュヌスが発見され」<sup>(44)</sup>、前117年に「10歳のアンドロギュヌスが発見され」ている<sup>(45)</sup>（表を参照）。こうした事例と照らし合わせると、前207年のインターセックスの誕生とは、実際には4歳のインターセックスの発見であったであろう。フルシノの人々は、誕生以来そのインターセックスを執政官に知らせようとはしなかったのである。それゆえ、ローゼンベルガーとともに次のように推測してもよいであろう。4歳のインターセックスは探し出された。それも、改めて異象を求めた元老院によってである<sup>(46)</sup>、と。

では、なぜ元老院は改めて異象を求めたのであろうか。この時エトルリアから卜師が召喚されることになったが、卜師はエトルリア貴族の一員であった<sup>(47)</sup>。そして、エトルリア貴族は、まさにこの時期に離反の動きを強めていた。それゆえ、元老院は、エトルリア貴族のそうした動向を考慮して、卜師を召喚するために改めて異象を求めたのである。

では、卜腸師を召喚するために、なぜ元老院はインターセックスの異象を用立てたのであろうか。インターセックスは卜腸師によって「恐ろしく嫌悪すべき異象」と見なされており、その処理は言わば卜腸師の御家芸だったからである。卜腸師は種々の異象の解釈や処理に関わる知識をもち伝えており、そこには奇形の処理に関わる知識も含まれていた<sup>(48)</sup>。そして、それに従って、卜腸師たちはこの時インターセックスを溺殺したのである<sup>(49)</sup>。

以上を要するに、元老院は、エトルリア貴族が離反の動きを強めていたことを考慮して、その一員である卜腸師を召喚するために、卜腸師を召喚するのに恰好のインターセックスの異象を用立てたのである。また、アウエンティヌス丘のユノ・レギナに生贄が捧げられたことも同じ考慮に基づいていた。ユノはそもそも生物界の秩序の保護者であると信じられており、インターセックスの異象の宗教儀礼の焦点たるに相応しい神であったが、アウエンティヌス丘のユノ・レギナは、前396年に独裁官のマルクス・フリウス・カミッルスがエトルリアのウェイイから勧請したエトルリアの戦の神でもあったからである<sup>(50)</sup>。

さて、このように、第2次ポエニ戦争下のエトルリアの綱紀に対する元老院の憂慮を勘案しながら前207年のインターセックスの異象とその宗教儀礼を振り返ると、それらの担った政治的な意義が明らかになる。すなわち、前207年のインターセックスの異象とその宗教儀礼は、離反の動きを強めていたエトルリア貴族に対して、第2次ポエニ戦争最大の危機を迎えつつあった元老院の「メッセージ」を伝える「伝達媒体」であった。元老院は、インターセックスを異象と認定し、卜腸師たちにインターセックスを処理させ、エトルリア起源の神をその宗教儀礼の焦点に据えることで、ローマとの不平等な同盟関係に不満を抱くエトルリア貴族に対して精神的一体感を表明したのである<sup>(51)</sup>。

前209年のインターセックスの異象についても同断であったであろう。そのインターセックスはエトルリア同盟市の異象に前後して異象と認定されたのであるが、元老院は、エトルリア同盟市の異象を認定するとともにインターセックスを異象と認定することで、エトルリア貴族に対して精神的一体感を表明したのである<sup>(52)</sup>。

また、先述の通り、前200年にも2人のインターセックスが異象と認定され、その宗教儀礼が執行されたが、これも同断であったであろう。前201年にローマとカルタゴの間で和平が結ばれ、第2次ポエニ戦争は終結していた。しかしながら、ハスドルバル軍の残兵ハミルカルが、ガッリア人を率いてプラケンティアを襲撃し、その後クレモナを包囲していた<sup>(53)</sup>。そのため、インターセックスの異象の宗教儀礼が執行された後、エトルリアに置かれた2軍団がクレモナに派遣された。そして、それと入れ替わりにエトルリアには5000人の同盟部隊が移されたにすぎなかったが<sup>(54)</sup>、元老院は、インターセックスの異象とその宗教儀礼でもってエトルリア貴族に対して精神的一体感を表明することで、エトルリアに駐留するローマ軍の縮小、そして撤退<sup>(55)</sup>の道をつけたのである。

こうして、前200年の事例を含めて、第2次ポエニ戦争下にインターセックスの異象とその宗教儀礼は、ローマとの不平等な同盟関係に不満を抱くエトルリア貴族に対して精神的一体感を表明する元老院の「伝達媒体」であったと見ることができる。しかし、前200年より後、前126年までの74年間に、インターセックスの異象の事例はわずか3例に留まっている（表を参照）。この間、エトルリアで前196年に奴隷の反乱が生じたためローマ軍が派遣され<sup>(56)</sup>、また前190年にもエトルリアはローマ軍の派遣を見たが<sup>(57)</sup>、第2次ポエニ戦争下に離反していた「エトルリア人」の調査<sup>(58)</sup>と「多数のエトルリア貴族たち」の処罰<sup>(59)</sup>は前200年までに済んでおり<sup>(60)</sup>、元老院とエトルリア貴族の関係について言うと「比較的落ち着いた数十年」であった<sup>(61)</sup>。しかしながら、前125年以降、インターセックスの異象の認定頻度は上昇し、前1世紀初頭に頂点に達する。そして、前92年より後、インターセックスは異象と認定されなくなったのである（表を参照）。なぜインターセックスは異象と認定されなくなったのであろうか。インターセックスの異象とその宗教儀礼が元老院とエトルリア貴族の関係において「伝達媒体」としての意義を担っていたことを確認した今、この間の元老院とエトルリア貴族の関係を探って、そうした政治的な意義が失効するに至る経緯を推定し、この問題に答えたい。

前2世紀後半、第2次ポエニ戦争でハンニバルがイタリアを侵寇していたため、そしてその後、海外で続発した戦争に農民が長期に渡って従軍したため、イタリアの農地が広く荒廃した。その結果として、また海寄りの大都市の近辺では属州から穀物が流入するようになったことも作用して、農民は窮地に陥り農地を手放したが、戦争と属州の搾取で私腹を肥やしたノービレスらがそうした農地を手に入れ、戦勝によって獲得された奴隷を労働力として使用したので、離農民が増加し貧民と化していた。軍の中核をなした農民の没落が惹起する軍事力の低下を憂えたティベリウス・センプロニウス・グラックスは、農地の配分を画策し、前133年に護民官に就任すると農地法（*lex agraria*）を成立させた。国有地の先取占有面積を制限し、制限面積を超える先取占有地を、土地を失ったローマ市民に割り当てることを定めた同法は、広大な国有地を先取占有していたノービレスらの反対に抗して成立したものの、法定の業務を執行した農地配分三人委員会（*tresviri agris dandis*）と土地所有者との間に土地の法的性格——どの土地が本来の私有地で、どの土地がかつての国有地なのか——を巡る係争を引き起こした上、イタリア同盟市民の不満も惹起した。イタリア同盟市の富者もローマの国有地を含む広大な土地を所有していたが、やはりその法的性格について了解させられることすらないままに土地を没収され、その上その没収地がローマ市民権（*civitas Romana*）をもたないがゆえに自市の貧民に割り当てられることがなかったため、その不満は殊更であった。そこで、前129年、イタリア同盟市民の意を受けて小スキピオが元老院に働きかけ、その結果、農地配分三人委員会は土地の法的性格を判定する権限を取り上げられ、農地配分事業が停滞した。それに対して、農地配分三人委員会の一員であったマルクス・フルウィウス・フラックスは、前125年に執政官に就任すると、前年来計画していた通り、イタリア同盟市民に望みに応じてローマ市民権かプロウオカーティオー（*provocatio*）権のいずれかを付与するという法を提案した。その意図は、ローマの政務官の権力に対する保護を約束することで、土地を没収されるイタリア同盟市民の不満を宥め、農地配分事業を貫徹することであったであろう。大カトやガイウス・センプロニウス・グラックスが憤ったように、イタリア同盟市の名望家ですらローマの政務官の暴慢に苦しんでいたのである<sup>(62)</sup>。それゆえ、イタリア同盟市民は「所有地より市民権を選んで」フラックスの法案を歓迎したが、「元老院が自分たちの従属民を〔自分たちと〕同等の市民とすることになると憤慨した」ため、結局同案は成立せず、ローマ市民権を拒絶されたことにイタリア同盟市民は不満を抱いたのである<sup>(63)</sup>。

エトルリア貴族についても同断であったであろう。ティベリウス・グラックスが農地法を構想したそもそものきっかけは、前137年に財務官としてヌマンティアに向かう途次、エトルリアを通過して、人気の少ないその土地とそこで働く「外国から連れて来られた奴隷たち」を見たことであったと喧伝されたが<sup>(64)</sup>、このことから推測されるように、エトルリア貴族もローマの国有地を含む広大な土地を所有していた<sup>(65)</sup>。それゆえ、前133年以降、「エトルリアの『指導者たち』は、自分たちの土地の一部を農地の再分配に取られることを予期して容易ならぬ不満を感じ、表明していた」<sup>(66)</sup>のである。そして、そうした不満を元老院は拭い去るべく図ったのであるが、フラックスの法案を不成立に終わらせたことで、ローマ市民権を拒絶されたことに対するエトルリア貴族の不満を宥める必要が依然としてあった——インターセックスの異象の認定頻度が上昇したのはこれ以降であった。

ところで、マクベインは、前130年代から同盟市戦争にかけてト腸師がローマの異象に関与する事例の増加したことを、概して土地の没収に対するエトルリア貴族の懸念に関係づけている<sup>(67)</sup>。しかし、前125年のイタリア同盟市民の意向を踏まえると、むしろ次のように推測できよう。すなわち、前125年以降、元老院は、インターセックスの異象とその宗教儀礼をもってエトルリア貴族に対して精神的一体感を表明することで、ローマ市民権を拒絶されたことに対するエトルリア貴族の不満を宥めようとしたのである、と。

しかしながら、その不満は消えず、前1世紀初頭に頂点に達することになった。すでに前2世紀末に、ローマ市民権は、「法律」を無視したガイウス・マリウスの一存で武勇に秀でた一部のイタリア同盟市民に付与されていた<sup>(68)</sup>。それによって、イタリア同盟市民によるローマ市民権の追求に拍車がかけられ、前90年代初めには多数のイタリア同盟市民がローマ市民のうちに潜り込んだが<sup>(69)</sup>、前95年にリキニウス・ムキ

ウス法 (lex Licinia Mucia) が成立する。ローマ市民のうちに潜り込んでいたイタリア同盟市民を摘発することがその目的であったが<sup>(70)</sup>、イタリア同盟市民の不満は高まった<sup>(71)</sup>。そこで、前91年、イタリア同盟市民の意を受けて護民官のマルクス・リウィウス・ドルスが、土地の没収と引き替えにローマ市民権を付与することを約束した上で農地法／植民地法を成立させた<sup>(72)</sup>。しかしながら、「エトルリア人」はこれに不満を抱き、「ウンブリア人」とともに都市ローマに押し寄せた<sup>(73)</sup>。イタリア同盟市民によるローマ市民権の不正取得が知られていた当時、未だに広大な土地を所有していたエトルリア貴族は、対価なしにローマ市民権を得ることを望んだのである<sup>(74)</sup>。こうして生じた混乱のなかでドルスの法は廃棄されたが<sup>(75)</sup>、結局ローマ市民権を手に入れることなく終わったイタリア同盟市民は、同年中に蜂起し、同盟市戦争が勃発した。イタリア南部から中部の人々が最初に蜂起したが<sup>(76)</sup>、前90年にはそれを聞きつけた「エトルリア人やウンブリア人」もローマと敵対した<sup>(77)</sup>。その結果、「元老院は、周囲で戦争が生じると自分たちには防ぎようがないのではないかと恐れて」、解放奴隷を兵士に登録して海岸線を防御させるとともに、「武器を取らずにいたか即座に武器を置いていた人々」に対価なしにローマ市民権を付与することを決定し、その決定を「エトルリア人に伝え広めたが、彼らは喜んで市民権を受け取った」<sup>(78)</sup>——これにより「エトルリア人」はローマ市民となり、元老院とエトルリア貴族の精神的一体感はローマ市民権の保持によって証されることになったのである。

こうして、第2次ポエニ戦争下にはローマとの不平等な同盟関係に不満を抱くエトルリア貴族に対して精神的一体感を表明する元老院の「伝達媒体」であったと見ることができたインターセックスの異像とその宗教儀礼は、前125年以降、ローマ市民権の拒絶に不満を抱くエトルリア貴族に対してそれを表明する「伝達媒体」として用いられたが、同盟市戦争の最中に「エトルリア人」がローマ市民権を得たことによって、そうした政治的な意義が失効した<sup>(79)</sup>——このように推定できよう。そして、それがために、それ以降、インターセックスは異像と認定されなくなったのである。

## 結論

近年インターセックスに対する外科手術が議論的になってきた。最後にそうした状況を概観し、それを踏まえて本稿の結論を述べたい。

日本でこれまでインターセックスに対して用いられてきた治療法は、1950年代にアメリカで提唱されたジョン・マネーの理論に基づいている<sup>(80)</sup>。マネーによると、「子供は生まれた時点では性心理的に中立である」がゆえに男女いずれの性も選択されうるが、その後、「子供は『正しい』男女の性的特徴を有した身体に基づいてジェンダーアイデンティティを形成していく」<sup>(81)</sup>。そして、こうした理論に基づき、これまでインターセックスの両親に対して、出産後速やかに性を選択することと、早期に「正しい」性器を形成して選択された性的特徴を補強することが勧められてきたのである<sup>(82)</sup>。

しかしながら、マネーの理論の論拠となった「ジョン・ジョーンのケース」の破綻が明らかにされた<sup>(83)</sup>ことを主なる契機として、1990年代後半にアメリカでその理論に対する異論が声高に唱えられるようになり<sup>(84)</sup>、早期に「正しい」性器を形成する外科手術も批判を浴びるようになった。「性感とオルガズムを可能にする神経繊維束を維持しようと努力しているにも関わらず、『正常な大きさの』クリトリスやペニスを『再建する』多くの外科手術は、結果として感覚、そして／または機能を減退させることになっている」<sup>(85)</sup>。外科手術の進歩を頼みとすることはできない。というのも、そうした外科手術はまた、「『修正され』ない限りその子供は愛されないという考えを正当化する」<sup>(86)</sup> ことによって、インターセックスに「何か根本的に誤っているものが彼らにあるかのよう」に恥辱感を与え<sup>(87)</sup>、「修正され」た後もそうした恥辱感でインターセックスを苦しめ続けるからである<sup>(88)</sup>。そして、こうした批判の声がわき上がるなか、マネーの理論に対して異論を唱えたミルトン・ダイヤモンドは、H・キース・シグムンドソンとともに次のように勧告するに至った。すなわち、インターセックス自身のインフォームドコンセントが可能になる時まで「美容形成上の理由だけで大きな手術を行なってはならない。身体的医学的健康に関わる場合だけ手術すべきで

ある」<sup>(89)</sup>、と。

このように、インターセックスに対する外科手術が議論の的になってきた状況を踏まえると、外科手術の効力に訴えるというディオドロスに見られる類いの「合理的な反応のおかげで」ローマのインターセックス観が変容したというブリソンの見解は、その変容に際してそうした「反応」が果たした役割を過大視することで、インターセックスに対する外科手術の正当性を喧伝し、そうすることによって、それを支える「作業の手助け」になると言えよう。しかしながら、ローマでインターセックスが異象と認定され殺害される時代から「お慰み」と考えられる時代へと変化したのは、インターセックスの異象とその宗教儀礼の担った政治的な意義が同盟市戦争の最中に失効したため、インターセックスが異像と認定されなくなつて、インターセックスを異象と見なす迷信の拘束力が弱まり、それに応じて外科手術の効力に訴えるという「合理的な反応」が影響を及ぼし、「2つの形をもつ者」と思われるような者を「人間たちを仰天させ欺く」「自然の戯れ」と見なしたからであった。すでに迷信の拘束力が弱まっていたローマにそうした見方を広めながら、インターセックスを「お慰み」にする一方、「どちらの性も、単純で〔2つの性器が〕混在していない性器をもっている」と唱えて「2つの形をもつもの」と思われるような性器を修正することを正当化していったこと、これこそ、ローマにおけるインターセックス観の変容に際して外科手術の効力に訴えるという「合理的な反応」が果たした役割なのであった。

## 注

- (1) 「内性器・外性器、染色体、ホルモンの状態がそれぞれ単独・複合的に『標準』の男女の型とは異なっている状態」にある者に対する「誤解や偏見」を生まないように、そうした「状態」を指して「現在ではインターセックスという言葉が広く使用されている」(入江恵子「インターセックスをとりまく医療の歴史」、奈良女子大学大学院人間文化研究科『人間文化研究科年報』20号、2004年、179頁)。本稿もまたこの趨勢に従ってその言葉を使用するが、本稿ではそれはおよそ性器の外見が男女両方の特徴をもつように思われる者を指している(ラテン語の単語では *hermaphroditus*, *androgynus*, *semimas* などによって言われる)。(2) Plinius, *Naturalis Historia*, 7. 34 (『プリニウスの博物誌』I、中野定雄他訳、雄山閣、1986年、302頁を参照)。(3) L. Brisson, *Sexual Ambivalence* (trans. by J. Lloyd), Berkeley 2002, 31。(4) *Ibid.*, 37。(5) *Ibid.*, 38。(6) *Ibid.*, xiii (『英語版への序文』)。(7) R. Bloch, *Les prodiges dans l'Antiquité classique*, Paris 1963, 112-113。(8) R. Drews, 'Pontiffs, Prodiges, and the Disappearance of the *Annales Maximi*', *Classical Philology* 83, 1988, 293-296。(9) B. MacBain, *Prodigy and Expiation* (Collection Latomus 177), Bruxelles 1982, 68。(10) Livius, 27. 11. 1-6。(11) Livius, 27. 37. 1-6。(12) Wissowa, 'Supplicationes', *RE IV A 1*, Stuttgart 1931, 946。(13) Livius, 27. 36. 1-4。(14) Livius, 27. 37. 6-7。(15) Livius, 27. 37. 7。(16) Livius, 27. 37. 11-15。(17) Livius, 27. 38. 1。(18) Livius, 31. 12. 5-10。なお、「ガイウス・クラウディウス〔・ネロ〕とマルクス・リウィウス〔・サリナトル〕が執政官であった時」とは前207年である。また、「加えて」で始まる「文は余計であり、リウィウスは明らかに自分の出典を不明瞭にした。処女たちの行列と進物は、付加的な行為としてではなく、『同じ儀式』の内容として理解されるべきである」(B. MacBain, *op. cit.*, 128)。(19) R. Drews, *art. cit.*, 298。なお、これに続けてドルーズは次のように述べている。「ディオドロスは、恐らくそのテーマに関わるポセイドニオスの考えを要約しながら、自分の歴史書の数章(32. 10-12)をアンドロギュヌスの性器の医学的な説明に当てた。その余談の終わりでディオドロスは、そのような解剖学上の欠陥は異象であると信じる人々の迷信を批判した」。(20) *Ibid.*, 299。(21) R. Garland, *The Eye of the Beholder*, New York 1995, 70。(22) V. Rosenberger, *Gezähmte Götter*, Stuttgart 1998, 213。(23) *Ibid.*, 213-214。(24) *Ibid.*, 232。(25) Wilcken, 'Alexandros 22', *RE I 1*, Stuttgart 1893, 1437-1438。(26) Diodorus Siculus, 32. 10. 1-12. 3。(27) L. Brisson, *op. cit.*, 37。(28) F. Kudlien, 'Diodors Zwitter-Exkurs als Testimonium hellenistischer Medizin', *Clio Medica* 1, 1966, 323。(29) Paulus Aegineta, *Libri V-VII*, edidit I. L. Heiberg, Leipzig & Berlin 1924, 6. 69。(30) W. Morel, 'Pharmakopoles', *RE XIX 2*, Stuttgart 1938, 1840。(31) W. V. Harris, *Rome in Etruria and Umbria*, Oxford 1971, 135。また145-146。なお、エトルリアに置かれた2軍団の兵員をリウィウスは記していないが、前215年に1軍団が5000人の歩兵と400人の騎士から編成された(Livius, 23. 34. 13)こと、また前210年には1軍団が5000人の歩兵と300人の騎士から編成された(Livius, 26. 28. 7)ことを伝えている。(32) Livius, 27. 21. 6-8。(33) Livius, 27. 22. 13。(34) Livius, 27. 24. 1-9。(35) ハスドルバルがピレネー山脈を越えたのは、前208年の初冬であった(A. J. Pfiffig, 'Die Haltung Etruriens im 2. Punischen Krieg', *Historia* 15, 1966, 203)。(36) *Ibid.*, 196-197。(37) *Ibid.*, 195。(38) Livius, 28.

10. 4-5. (39) B. MacBain, *op. cit.*, 67. また108-110. (40) Livius, 27. 4. 14. (41) Livius, 27. 23. 4. (42) Livius, 27. 38. 6-7. (43) Livius, 39. 22. 5. またObsequens, 3. (44) Obsequens, 34. (45) Obsequens, 36. (46) V. Rosenberger, *op. cit.*, 195-196. (47) B. MacBain, *op. cit.*, 43. (48) R. Bloch, *op. cit.*, 69-70. (49) B. MacBain, *op. cit.*, 68. また121. (50) *Ibid.*, 70-71. (51) *Ibid.*, 60. また44-45. (52) なお、前209年にインターセックスの異象の宗教儀礼が執行されなかったのは、ハスドルバルのイタリア侵攻を目前にした前207年ほどには、元老院がエトルリアの綱紀に憂慮を深めていなかったからであろう。(53) Livius, 31. 10. 1-7. (54) Livius, 31. 11. 1-4, 31. 21. 1-3. (55) 前200年は、前212年以降続いていたローマ軍のエトルリア駐留の最後の年であった (W. V. Harris, *op. cit.*, 137. また135, 145-146). (56) Livius, 33. 36. 1-3. (57) Livius, 37. 2. 9. また37. 50. 13, 37. 57. 3-4. (58) Livius, 28. 10. 4-5, 30. 26. 12. (59) Livius, 29. 36. 10-12. (60) こうした調査や処罰は、ローマ軍のエトルリア駐留の最後の年である前200年まで続いた (W. V. Harris, *op. cit.*, 137). (61) B. MacBain, *op. cit.*, 78. (62) A. Gellius, *Noctes Atticae*, 10. 3. 2-3, 10. 3. 17-19. (63) Appianus, *Bella Civilia*, 1. 21. また1. 34. (64) Plutarchus, *Tiberius Gracchus*, 8. 7 (『プルターク英雄伝』10、河野与一訳、岩波文庫、1956年、79頁を参照). (65) E. Badian, *Foreign Clientelae (264-70 B. C.)*, Oxford 1958, 221. (66) B. MacBain, *op. cit.*, 73. また75. (67) *Ibid.*, 78. (68) Plutarchus, *Marius*, 28. 2 (『プルターク英雄伝』6、河野与一訳、岩波文庫、1954年、89頁を参照). (69) E. Badian, *op. cit.*, 212-213. (70) *Ibid.*, 213, 297, n. R. (71) *Ibid.*, 214. (72) Livius, *Periochae*, 71. Appianus, *Bella Civilia*, 1. 35-36. (73) Appianus, *Bella Civilia*, 1. 36. (74) E. Badian, *op. cit.*, 220-221. (75) *Ibid.*, 218-219. (76) Livius, *Periochae*, 72, Appianus, *Bella Civilia*, 1. 39. (77) Appianus, *Bella Civilia*, 1. 49. なお、リウィウスによると、前89年、「ウンブリア人」と「エトルリア人」がローマから離反していたので、アウルス・プロティウスとルキウス・ボルキウス・カトがそれぞれ「ウンブリア人」と「エトルリア人」を「戦闘で打ち負かした」(Livius, *Periochae*, 74) が、これは実際には前90年の出来事であった (W. V. Harris, *op. cit.*, 215). (78) Appianus, *Bella Civilia*, 1. 49. なお、この決定は前90年のユリウス法 (lex Iulia) であるが、アッピアノスは、ここで同法の対象者を「イタリア人のうち依然として [ローマとの] 同盟関係に留まっている人々」と記している。しかしながら、実際には「武器を取らずにいたか即座に武器を置いていた人々」が同法の対象者であり、「エトルリア人」は後者に当たる (W. V. Harris, *op. cit.*, 217. また230-231). (79) B. MacBain, *op. cit.*, 81. (80) 高橋郁子「性分化異常」、『小児科診療』69巻増刊号、2006年、591頁。(81) 入江恵子、前掲論文、181頁。(82) 島田憲次他「性別判定の方針と治療」、『日本臨床』62巻2号、2004年、392-395頁。(83) M. Diamond and H. K. Sigmundson, 'Sex Reassignment at Birth', *Archives of Pediatrics and Adolescent Medicine* 151, 1997, 298-304によってである。(84) 入江恵子、前掲論文、182-183頁。(85) B. E. Wilson and W. G. Reiner, 'Management of Intersex', *Intersex in the Age of Ethics* (= *IAE*), ed. by A. D. Dreger, Hagerstown, 1999, 125. (86) C. Chase, 'Surgical Progress Is Not the Answer to Intersexuality', *IAE*, 155. (87) E. G. Howe, 'Intersexuality', *IAE*, 212. (88) M. Coventry, 'Finding the Words', *IAE*, 71-76. (89) M・ダイヤモンド、H・K・シグムンドソン「インターセックスの子どもへのマネージメントガイドライン」、針間克己訳、『助産婦雑誌』54巻2号、2000年、37頁。なお、「ほとんどのインターセックス者の身体状態は、全く手術をしないままであることが可能である」(同上、39頁)。

表 インターセックスの異象の事例

Date	Place	Age	Expiation		References
209 B. C.	Sinuessa	newborn	–	Sacrifices, prayers and games	Livius, 27, 11, 4-6.
207 B. C.	Frusino	newborn	Sea	27 girls etc.	Livius, 27, 37, 5-15.
200 B. C.	Sabina	newborn	Sea	27 girls etc.	Livius, 31, 12, 6-10.
200 B. C.	Sabina	16 years	Sea	27 girls etc.	Livius, 31, 12, 6-10.
186 B. C.	Umbria	12 years	Sea	–	Livius, 39, 22, 5. Obsequens, 3.
142 B. C.	Luna	newborn	Sea	–	Obsequens, 22.
133 B. C.	Ager Ferentinus	newborn	River	27 girls	Obsequens, 27a.
125 B. C.	Roma	newborn	–	27 girls etc.	Phlegon Trallianus, <i>Miracula</i> , 10
122 B. C.	Forum Vessanum	newborn	Sea	–	Obsequens, 32.
119 B. C.	Ager Romanus	8 years	Sea	27 girls	Obsequens, 34.
117 B. C.	Saturnia	10 years	Sea	27 girls	Obsequens, 36.
104 B. C.	–	–	–	27 girls etc.	Obsequens, 43.
99 B. C.	–	–	–	27 girls etc.	Obsequens, 46.
98 B. C.	–	–	Sea	–	Obsequens, 47.
97 B. C.	–	–	Sea	27 girls etc.	Obsequens, 48.
95 B. C.	Urbinum	newborn	Sea	–	Obsequens, 50.
92 B. C.	Arretium	–	–	27 girls etc.	Obsequens, 53.
92 B. C.	Arretium	–	–	27 girls etc.	Obsequens, 53.

注記：本表を作成するに当たっては、L. Brisson, *op. cit.*, 26-27を下敷きにして、B. MacBain, *op. cit.*, 127-135を参照した。

田村 慎雄 (たむら・みつお)

横浜国立大学大学院教育学研究科社会科教育専攻人間・社会研究専修1996年3月修了

矢内 光一 (やない・こういち)

横浜国立大学教育人間科学部教授 (インターカルチャー講座)